11/24 研修会に参加しました
「流域治水への転換 ―総合治水・水災害対策の計画と推進」報告

水害に備えるために

日本では、地震に備える一方で、なぜか水害を軽くとらえがちです。激甚化する気候変動で、気温が２℃上昇すれば、洪水発生頻度は約２倍、４℃上昇で約４倍との研究報告もあります。

水害はある程度予測ができ、対応できる場合が多いため、国交省「重ねるハザードマップ」や、中小河川については「わがまちハザードマップ」で災害リスクを知り、事前避難や、時間差洪水に備えるよう意識しておくことが重要です。

◆機械系統の浸水対策

日本では、ほとんど１階や地下に置かれている非常用電源 、燃料タンク、分電盤などを２階以上に置くことが重要です。

◆病院・市役所の水害対策

病院は電源喪失で、患者が危険な状態に陥るため、電源の確保や食料備蓄などが必要です。

市役所が浸水・水没しても、災害対応に支障をきたさないよう、代替庁舎、首長不在時の指令系統、職員の参集体制、通信手段の確保、データのバックアップ、業務の優先順位付けが必要です。

危ないところに住まない

国土の約１割の氾濫区域に人口の約半分、資産の約 75%が集中。国土の 35%、全人口の７割以上に災害リスクがあります。

以前なら水害リスクがあり、到底家を建てないような土地に、開発業者が入り込み、乱開発、大規模に造成。そこにリスクを知らない新住民が住み始めました。市も税収が増えるため、開発を進めてきました。しかし、ひとたび災害が起きれば、財産や人命まで危険にさらされます。人口減少が進む今、危ない土地は開発抑制をする一方で、旧市街地の空き家対策などに本腰を入れ、持続可能なまちづくりをしていくべきです。

一宮川氾濫で出た膨大な廃棄物の前で、言葉を失いました。

千葉県では、2019 年 10 月 25 日、豪雨で甚大な被害を受けた茂原市一宮川で、流域治水のモデル事業が進んでいます。これまでは分断されていた上中下流の自治体が一体化して治水対策を行っています。流域治水の取り組みが全県に広がるよう、声をあげていきます。

川口絵未

【第18回総会のご報告】

コロナ禍により、昨年に引き続き、書面決議となりました。

30名の方から回答をいただき、第1号議案2020年度活動報告、第２号議案2020年度会計報告、第３号議案2021年度活動方針、第４号議案2021年度予算、第５号議案役員改選について、全て反対はなく可決されました。ご意見として、「今後も現地の地滑り問題など、八ッ場ダムの情報発信に努めてほしい」などがあり、そのように取り組む所存です。皆様の協力を感謝します。

編集後記

今、注目！田んぼダム

田んぼダムとは、水田が持っている貯水機能を利用し、大雨の時に水田に雨水を一時的に貯留します。時間をかけてゆっくりと排水することで、河川や排水路の急激な水位上昇を防ぎ、下流の住宅地等の洪水被害を軽減する取り組みです。近年多発する豪雨に、ダムや堤防では対応できないため、流域に関わる関係者が協働して水災害対策を行う「流域治水」の一つとして、今取り組む自治体が全国で増えています。

2019年10月の豪雨により、甚大な被害を受けた一宮川流域の茂原市で、取り組みが始まりました。新潟県や秋田県など、田んぼの面積が多く占める県では、県レベルで推進しています。

田んぼダムは、大規模な改修の必要がなく、排水口に調整板等を設置するだけの少ない費用で済みます。進めるには生産者への効果の周知や理解と十分な補償が不可欠です。やはり国や自治体が補助金を出す等積極的に取り組む必要があります。

松島　梢

WATER & THE YANBA

vol. 34

CONTENTS

- 代表挨拶 …… 武笠紀子
- 八ッ場ダム、地元雇用はどこへやら …… 大野博美
- ～石木ダム建設予定地、川原（こうばる）の里に行ってきました～ …… 中台ヒデ子
- 研修会に参加しました …… 川口絵未
- 総会報告 …… 大野博美
- 編集後記 …… 松島　梢

編集：猪俣悦子

水問題と八ッ場ダムを考える千葉の会

代　表：武笠紀子・大野博美
住　所：〒270-0007　松戸市中金杉4－71－2
TEL　：090-9365-9608（武笠）
WEB　：「水問題と八ッ場ダムを考える千葉の会」で 検索してください。

2022年１月５日発行

明けましておめでとうございます。コロナ禍のため、この２年間は活動が停滞しましたが、本年は、総会を始め、様々な企画を考えておりますので、よろしくお願いいたします。

近年の気候変動により、日本でも洪水が頻発し、国もダムや堤防ばかりでなく『流域治水』という施策を打ち出してきました。千葉県では 2019 年 10 月の大洪水を経て『流域浸水対策計画』を立て、被害が大きかった一宮川流域をモデルとして対策を進めていますが、治水対策を考える上では、先進的な『滋賀県流域治水の推進に関する条例』の学習等も企画していきたいと思います。みなさまからのご意見・ご提案をお待ちしております。

共同代表　武笠紀子

八ッ場ダム、地元雇用はどこへやら

八ッ場ダム湖では、観光の目玉として、2020 年夏から水陸両用バスが運行されています。初期投資の財源は、地域振興と地元の雇用創出を目的とする「地域対策基金」＊です。ところが、維持管理費は長野原町の負担となることから、ネを上げた町は、経費削減を理由に、委託先を地元の八ッ場ふるさと館から東京の業者に変更すると、12 月 8 日発表しました。他にも、地元の観光事業には次々と東京の業者が参入してきています。

本来の目的を忘れ、豊かな自然を壊し、画一的な観光地と化していく現地に対し、基金を拠出している千葉県として複雑な想いです。

共同代表　大野博美

＊八ッ場ダムの水利権を持つ 1 都 4 県（東京都、埼玉県、千葉県、茨城県、群馬県）が負担し、総額 178 億円。千葉県の負担額は 28 億円。

●会費納入のお願い

（一口　1000 円／年）
会費振込先：００１２０－５－４２６４８９
＊会計年度は１月から 12 月末まで

～石木ダム建設予定地、川原の里に行ってきました～

11月25日「石木ダムを止めよう100人あつまれ！川原の里へ」集会が開催され、全国から230人も集まりました。

報告：中台ヒデ子　写真：宮田みどり

石木ダムについては、「八ッ場ダムをストップさせる千葉の会」の活動時に知っていた程度。そんな私に衝撃を与えたのが、ドキュメンタリー映画「ほたるの川のまもりびと」でした。石木川のほとりで、人と自然が織りなす風景。家族のような信頼感で結ばれた13世帯の営み。しかし、半世紀ほど前にこの地、川原（こうばる）を水底に沈めるダム計画が持ち上がり、川原地区の住民たちは、ダム計画に翻弄されながらも「ふるさと＝暮らし」を守るため、ダム反対の抗議活動を続けている映像でした。

石木川は源氏ホタルの生息地、川原はホタルの里とも知られ、５月末には沢山のホタルが流れ星のように飛び交い、ほたる祭りには団結小屋で３人のおばあちゃんたちが楽しそうに「ほたる籠」作りに専念していたそうです。私も地元でホタルの生息地の環境整備をしているので、川原に飛んで行って「ほたる籠」を教えてほしいと思っていました。

川原に行くきっかけとなったのが「石木川まもり隊」の松本美智恵さんからの11月25日「石木ダムを止めよう100人あつまれ！川原の里へ」集会のお知らせでした。３年前に、佐倉で「ほたるの川のまもりびと」の上映会を実現してくれた宮田みどりさんを誘い、「千葉の会」のメッセージとカンパを預かり、川棚町川原に向かいました。

←山の上に本体工事のショベルカーが見えます。下は集会場所に集まってきた人々

↓当会のメッセージを読みあげる中台さん

長崎県の石木ダム計画について

石木ダムの建設計画は、1962年に浮上。長崎県と佐世保市が川棚町の石木川に計画するダムで、目的は佐世保市の利水と川棚町の治水。国が1975年、事業採択した。利水では佐世保市の人口減により水需要が年々減少している。また、治水の面では、石木川は支流であり、注ぎ込む川棚川の流域面積の9分の1に過ぎない。その川にダムを造ることで果たして治水に有効なのか。地域住民はダム建設の根拠についてもう一度検証すべきとしているが、県は住民の要望に答えず、住民との話し合いにも応じていない。

それどころか事業着工を強行し、2021年9月には本体工事が始まったと報道されている。ダム建設に伴うダム水没予定地川原は移転対象のうち約８割がすでに転居し、13世帯が残ったが、田畑や家屋の権利が奪われ、法的には県はいつでも強制収用できる状態だ。裁判でも県の主張を認める長崎地裁、福岡高裁の判決が出され、最高裁に上告中。

こうした厳しい現状でもあり、緊張感を持ちながら川原の里に向かいました。

百聞は一見にしかず

106号線沿いに石木郷に入ったとたん目についたのが、道路脇の巨大な工事。本体工事に着手とありましたが、こんなに進んでいたのかとびっくり。しかし実は石木郷の採石業者の砕石工事だったのです。石木ダム建設に伴う工事は、遠くの里山のてっぺんで機械音を響かせ、ショベルカーやダンプカーが動いていました。何の工事なのかはわかりません。

石木川。こんな「小川」に巨大ダムを造るとは…

集会で「人間の鎖」を作りました（中央が中台）

工事の機械音を除けば本当に静かな静かな川原の里。石木川のせせらぎも、里山の緑も一体となって「石木ダム反対！」の大きな大きな看板まで包み込んでしまっているようでした。石木川は見るからに小さな川。石木川の橋のたもとは子どもたちの大切な遊び場、遊泳や飛び込みの子どもたちの歓声が聞こえてきそうです。ここにダムを造る!!　実際に見て驚きです。こんな小さな支流にコンクリートの堰堤を造り、川原地区をダムの底に沈めることなど到底納得できません。

石木川の水質は、里山の自然と暮らしによって保たれてきましたが、ダムができればダム湖に滞留した水を飲むことになります。飲料水として誰も疑問を感じないのでしょうか。

ダム反対の力強い味方 嘉田由紀子参議院議員と（右：中台、左：宮田）

集会で使ったピンクリボンに、それぞれ「石木ダム反対」の言葉を書きました。

小さなダムの大きな闘い（日本一）

抗議行動を行っている座り込み現場では、朝８時～17時まで午前と午後５人ずつ交代し、1200回以上になるとのこと。日曜日以外毎日行われています。田畑を耕し、家の用事をしながらの座り込みは、心も体も休まることはないでしょう。しかしお会いした皆さんは元気でとても明るかった。お疲れなのに温かく迎えていただき、ありがとうございました。

常に公共事業が持ち上がると、住民は反対、賛成と分断させられ、対立の元になります。しかし川原の里の住民は13世帯の大きな家族であり、一丸となって「ダム反対！」と闘っているから頑張れるのだと思いました。座り込みの中で、初対面でありながら心情を話してくれた岩下すみ子さん。

「ダム建設を止めたい一心であきらめない。
小さなダムの大きな闘い（日本一）なの」

抗議の意志を伝えるため、朝８時から17時まで、座り込みを続ける地元のお母さんたち

長崎県民は石木ダムは要らないと声をあげてください

地方では過疎化が進み、地域のコミュニティも維持できなくなっています。しかし川原の里は過疎とは無縁です。何世代にもわたり住民が住み続け、コミュニティも生かされています。長崎県でこのような貴重な地区を、必要のないダムでダムの底に沈めていいはずがない。ダムと引き換えに失うものの大きさに気付いてほしい。長崎県民は石木ダムは要らないと声をあげてください。現地で強く思いました。